

子ども教育学科 子どもの学び研究所取組の概要

後藤 吉道
宮内 孝
川田耕太郎
河野 康男
藤本 朋美

目的

学部と連携拠点学校園との相互連携協力を深め、実践力を備えた学生の育成及び学校園の教員の資質向上を目指す。

研究経過

1. 学部と連携拠点学校園との連携

学部と連携拠点学校園との具体的な連携については、2010年度からの基本姿勢を継続しながら「子ども支援地域活動」において学生に具体的に携わらせることを原則としてきた。

ねらいは、小学校及び幼稚園並びに保育の場に学生が参加し、子どもを支える地域の活動に参加することを通して、子どもの地域に果たす役割を実践的に理解し、それを支える活動の意味を把握させ、学部の講義で学んだことを実践力へと発展させることである。

2010年度を連携の基本的な事柄が整備された年として位置付けられ、2011年度は連携活動を拡大し、2012年度以降は、連携活動がより円滑化した。

2. 拠点校との連携活動

連携拠点学校園とは研究員を通して、あるいは学校の具体的な教育活動への参加を通して、連携を深めてきた。さらに、拠点校を含む複数の園や学校で、観察実習や教育実習を実施してきた。

4) 本学部学生の小学校教育実習及び幼稚園教育実習の模擬授業の指導

5) 学校現場の課題について、大学側教員・研究員の研究協議活動の柱の一つは、本学のカリキュラムに応じた連携である。

教員採用試験前、教育実習前後、卒業研究発表等について共有したり指導・助言を仰いだりすることをとおして、多面的に学び合うことをねらいとしている。

もう一つは、研究員と学生との対談である。教育現場の今日的課題の解決を目指した学生の学修や地域活動について懇談的に指導を受けたり、教育現場の研究員から学ぶ姿勢を学生に身に付させたりすることをねらいとしている。

2. 令和5年度取組

| 月 日 | 主な研究活動内容 |
|-----------|----------------------|
| 6月13日(火) | 委嘱状交付 年間計画立案 |
| 7月18日(火) | (小学校) 教員採用試験の模擬授業の指導 |
| 10月3日(火) | 3年生とのグループ別対談 |
| 11月7日(火) | 1年生とのグループ別対談 |
| 12月12日(火) | 実習報告会 |
| 1月16日(火) | 2年生とのグループ別対談 |
| 2月6日(火) | 4年生の研究発表への指導 |

活動の具体的内容

月1回、16:30～18:00までの1時間30分実施してきた。令和5年度取組の概要は次のとおりである。

1. 主な研究内容

- 1) 学部と連携拠点学校園との連携の内容、在り方
- 2) 本学部学生の研究発表等への指導
- 3) 本学学生への指導的立場からの活動

活動の実際

研究会の内容と学生の取組に対する成果と課題を見るために、連携拠点学校園の研究員による評価を実施した。

1. 結果

「学びに向かう力・人間性等」「思考力・判断力・表現力」「知識・技能」の3つの観点のそれぞれについて4件法で評価を求めた。各回における評価は次のとおりである。

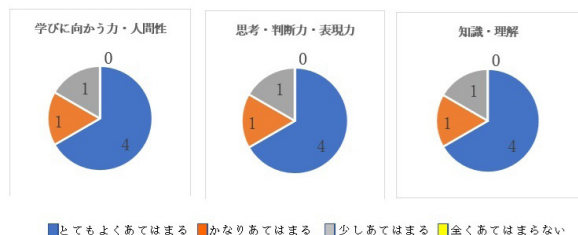


図1 第2回 4年生模擬授業指導

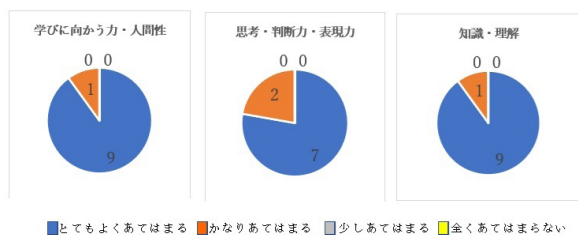


図2 第3回 3年生とのグループ対談

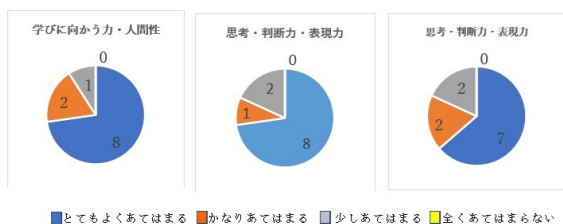


図3 第4回 1年生とのグループ対談

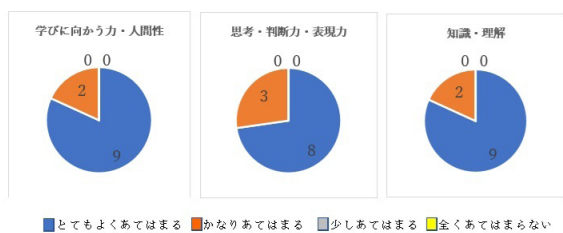


図4 第5回 実習報告会



図5 第6回 2年生とのグループ対談

2. 考察

○ 年間をとおして連携拠点学校園の研究者から学生の発言や姿勢に対して高い評価を得ることができた。

3つの観点の中では、全ての回において「学びに向かう力・人間性」が高い傾向にあり、本学部学生の姿勢が肯定的にとらえられていると言える。

「思考力・判断力・表現力」「知識・理解」はやや劣る結果となった。発表・対談などそれぞれの内容において、「考えたことをまとめる」「分かりやすく伝える」「発言を共有したり練り上げたりする」ことによって学びを高め合う力を伸ばすことが今後の課題と言える。

○ 学生の振り返りによると、連携拠点学校園の研究者による指導・助言が意欲の向上や不安等の解消につながったという感想が多かった。特に、グループ対談では、懇談的に回答をしていただいた。学生にとって安心感をもたらし、次への展望をもたらすことにつながったようである。連携事業の大きな成果と言える。

今後の展望及び課題

本学部と連携拠点学校園と「相互の資質向上のための連携の在り方に関する研究」や「人間の発達や育ちに関する研究」を進めることをねらいとして、計画通りの活動を実施することができた。連携拠点学校園の研究者・本学部学生・本学部教員がそれぞれの立場や視点から共にブラッシュアップを重ねてきた。

本学部学生が実践上の課題について、連携拠点学校園の研究者との対談をとおして解決の見通しをもつことができたり、発表に対する指導・助言を仰いだりすることは学生たちの実践的な学修を進める上で大きな成果があった。研究者とともに本学部教員も多面的に学び合うことができた。

また、研究会において幼稚園と小学校との校種の違いによるアプローチにより協議が深まった場面もあり、幼小連携の有用性を感じた。「4年生の卒業研究発表の指導」において、4年生が開発した遊具の効果的な活用法について協議した際のことである。工夫点ばかりでなく、発達段階における活用法の工夫について様々な視点から意見により実用化への幅が広まった。一つの教材・教具をもとに幼稚園と小学校の研究者の着眼点や視点の違いを感じる機会となった。地域連携事業なら

ではの成果であると言える。

今後は、これまでの連携協力体制を土台にしながら協議・研究する場を設け、更なる実践研究を積み重ねることが求められる。

研究員名簿及び大学側関係教員名簿

| | 連携学校園名 | 職 名 | 氏 名 |
|----|-----------------|------|---------|
| 1 | 学校法人天竜学園天竜祝吉幼稚園 | 園長 | 佐々木 慈 舟 |
| 2 | 学校法人天竜学園天竜幼稚園 | 主幹教諭 | 田 實 美 幸 |
| 3 | 学校法人天竜学園天竜第二幼稚園 | 主幹教諭 | 北 園 由美子 |
| 4 | 学校法人天竜学園天竜第三幼稚園 | 主幹教諭 | 山 城 隆 子 |
| 5 | 学校法人天竜学園天竜祝吉幼稚園 | 主幹教諭 | 河 野 祐 子 |
| 6 | 学校法人相愛学園第一幼稚園 | 主幹教諭 | 中 尾 恵美子 |
| 7 | 都城市立南小学校 | 主幹教諭 | 原 圭 史 |
| 8 | 都城市立東小学校 | 主幹教諭 | 嶽 野 直 樹 |
| 9 | 都城市立上長飯小学校 | 主幹教諭 | 弓 削 光 孝 |
| 10 | 都城市立祝吉小学校 | 主幹教諭 | 森 和 裕 |
| 11 | 三股町立三股小学校 | 主幹教諭 | 湯 地 豊 和 |
| 12 | 三股町立三股西小学校 | 主幹教諭 | 西 園 修 二 |

| | 大学学部名 | 職 名 | 氏 名 |
|---|-------------|-----|---------|
| 1 | 南九州大学人間発達学部 | 教授 | 宮 内 孝 |
| 2 | 南九州大学人間発達学部 | 准教授 | 後 藤 吉 道 |
| 3 | 南九州大学人間発達学部 | 准教授 | 川 田 耕太郎 |
| 4 | 南九州大学人間発達学部 | 准教授 | 河 野 康 男 |
| 5 | 南九州大学人間発達学部 | 准教授 | 藤 本 朋 美 |